

日本非文字文化研究および保護の実践に関する調査研究

神奈川大学COEプログラムと小澤昔ばなし研究所を例に

西村 真志葉 (北京師範大学文學院 / PD) NISHIMURA Mashiba

最近中国国内で「非物質文化」という言葉をよく耳にするが、これはもともと「無形文化」の中国語訳である。ユネスコで採択された文化財保護制度を背景に、中国国内でも2004年から「非物質文化」に関する政策が現れはじめた。⁽¹⁾「第一次国家級非物質文化遺産」と認定された申請対象は518項目におよび、民間文学(31)、民間音楽(72)、民間舞踏(41)、伝統戯劇(92)、曲芸(46)、雑技と競技(17)、民間美術(51)、伝統手工技術(89)、伝統医薬(9)、民俗(70)などの多領域にわたる。

これからわかるように、中国で「非物質文化」という名で呼ばれる保護対象は、中国民俗学が従来研究対象としてきたものである。中国政府の非物質文化遺産保護制度において、実質的な推進役は文化部を含む九つの政府部門⁽²⁾である。民俗学は文化部直轄の国家非物質文化遺産保護事業専門家委員会の一員として、アドバイザー的な役割を担っているにすぎない。民俗学が最も直接的に関与するのは、各地での非物質文化遺産申請の際においてである。

ユネスコの『無形文化遺産保護条約案』は「文化的活動・財・サービスは、もっぱら商業的価値を持つものとして扱われてはならない」としているが、多くの地域社会は当地の何かが「非物質文化」遺産と認定されれば、観光による地域振興を期待する。そればかりではない。2004年から2006年にかけて中国政府が非物質文化遺産保護に投入した経費は年間2000万元にのぼり、2006年には国家級非物質文化遺産目録上の各地に4000万元の経費が

配布された。つまり、「非物質文化」は「非物質文化」となりうる何かを所有している地域社会にとって大切な経済源となる。結果的に、中国政府の非物質文化遺産保護制度は多くの地域社会にあたりまえのものが実は価値あるものであることを認識させたわけだが、地域社会の認識した価値は勿論すぐに国家、民族、人類などの概念と結びつくわけではない。むしろそれはまず資源としての「非物質文化」を生み出す。それは、ユネスコや中国政府が目指す全人類の共同遺産の保護という理念からみればひどく世俗的であるかもしれないが、しかしより切実な地方社会の現実問題を浮かびあがらせる。

そうしたなかで、民俗学は他の学問のようにただ専門家として書面審査に関与するばかりではない。慣例として、民俗学者は事前に現地へ赴き、関係者から申請対象の説明を受け、そしてそれを目にする。それは彼にとって目新しいものかもしれないし、そうでもないかもしれない。しかしそれを取り巻く地方社会の切実な問題と世俗的な応酬は、彼がよく目にするものである。同時に、現地の関係者の説明や申請対象の実演などの背後に、彼はもう一つの見慣れたものを見つけるだろう。それは民俗学という学問と民俗学者の存在である。今日、「非物質文化」遺産を申請する側が民俗学の学問的知識、そして民俗学者を利用することは珍しくはない。彼がただの専門家であれば、申請対象の価値あるいは真偽を判断すればよい。しかし、たとえば民俗学的な資料を手に分こそがある口承伝説の発祥地だと主張しあう二つの村落を

(1) その流れを簡約すると、2004年4月、文化部と財政部が共同で『中国民族民間文化保護工程に関する通知』と『中国民族民間文化保護工程实施方案』を公布し、同年8月末に全国人民代表大会常務委員会でユネスコの『無形文化遺産保護条約案』が採択された。2005年3月には国務院辦公庁より各省、自治区、直轄市人民政府、国務院各部委員会、直結機構に『我が国の非物質文化遺産保護事業の強化に関する意見』と『国家級非物質文化遺産代表作申請評定暫時遂行方法』が通知され、同年6月末に国務院と文化部がそれぞれ『第一次国家級非物質文化遺産目録の通知』と『第一次国家級非物質文化遺産代表作申請に関する通知』を発表した。

(2) つまり文化部、発展改革委、教育部、国家民委、財政部、建設部、旅遊局、宗教局、文物局の九部門。ちなみに有形文化財を主な保護対象をしていた世界文化遺産では文化部、建設部、文物局、発展改革委、財政部、国土資源部、林業部、旅遊局、宗教局の九部門で対策をねっていた。

前にして、民俗学者である彼にはそれは難しいかもしれない。彼は専門家として申請書の制作について相談にのるだろう。そして、研究者として安易な文化批評よりも現象の描写に徹しようと努めるだろう⁽³⁾しかし同時に民俗学者として多くの矛盾に直面するだろう。

若輩者ではあるが、私自身もこのような民俗学者の一人である。私は四年ほどまえから北京市門頭溝区での民俗誌編纂や地方文化財保護目的の調査にたずさわっている。その間、私は地域社会が地域社会自身を生成する過程を描写しようと努力してきたが、結局のところ自分も調査、研究、保護などの形で民俗の再創造に関与しているのではないかという思いが頭を離れなかった。勿論、これは決して私だけの問題ではない。むしろ「非物質文化」を主要対象に学術活動を行ってきた民俗学が、中国政府の非物質文化遺産保護制度に協力する中で突如直面せざるにはいられなくなった一つの問題であり、それを問題視するかどうかは民俗学者と地方民俗愛好家が袂をわかち点だともいえる。近年、学術倫理、主体性をめぐる自省、フォークロリズムという問題が中国民俗学内で討論を巻き起こしているのは、決して偶然ではない。

そんな折に、神奈川大学COEプログラムから日本で調査を行う機会をいただいた。私は『日本非文字文化の研究および保護の実践に関する調査研究』という調査課題を提出し、中村ひろ子先生のご指導の下、具体的な計画を決めていった。私は神奈川大学COEプログラムと小澤俊夫氏の昔ばなし研究所を調査対象に選んだ。それは事前の文献調査で、前者が今後の研究のために資料の収集、分析、整理などを行っているのに対し、後者が今後の伝承のために「本来の形」で伝承を残し、伝承母胎を育成していることを知り、この二つの実践が現代社会における民俗事象の保護という目的をめぐって、民俗学がとりうる二つの対照的な方向を示唆していると考えたからである。そして、現在中国で「非物質文化」とよばれるものと、神奈川大学COEプログラムと昔ばなし研究所が対象とするものは、大差があるわけではない。両機関の実践は、非物質文化遺産保護制度推進に関与すると同時に、その結果引き起こされた討論のただなかにある中国民俗学に、

有意義な経験を啓示してくれるかもしれないと考えたのである。

短い調査ではあったが、神奈川大学COEプログラム支援事務室、COE研究員の土田拓、小野地健両氏から行き届いた手助けをいただいたおかげで、神奈川大学COEプログラム全班と昔ばなし研究所から順調にお話を聞くことができた。民俗学のフィールドワークではいい意味で期待を裏切られるものだが、今回もまたそうだった。

神奈川大学COEプログラムでの聞き取り調査中、一番印象深かったのは、異なる専門と信念を持つ研究者たちの個性が「非文字文化」と「資料の体系化」という枠組みのなかでせめぎあう姿である。これは人文・社会科学が共同研究という体制をとると必然的に生じる問題なのかもしれないが、中国民俗学ではこれほど多領域にわたる研究者が共同作業するということが少なく⁽⁴⁾そうした環境に慣れていた私には衝撃的だった。そして資料の「体系化」を追求する限り、私たちは「非文字文化」を生活的なコンテキストから切り離さなければならず、担い手の主体性は研究者の影に隠れてしまう。しかしこのことは、共同研究という体制をとる神奈川大学COEプログラムでは根本的には問題視されていなかった。民俗学がプログラムを支える唯一の理念ではないのである。

そして昔ばなし研究所の聞き取り調査では、中村と母子氏が「本来の姿」という言葉を繰り返されるのが非常に印象的だった。この元になっているのは伝承にはある種の「原型」が存在するという考え方で、担い手が伝承に行う自由すぎる再構成を、研究者が「逸脱」とみなしてしまい、何らかの「修正」手段を通じて研究者自身が伝承母胎とすりかわるという結果を招きやすくなる。⁽⁵⁾こ



(3)この点に関して中国社会科学院の施愛東が示唆に富んだ論文を書いている。施愛東《学术与生活：分道揚鑣的合作者 以各類“公祭大典”“文化旅游節”为中心的討論》(近日刊行予定)

(4)中国民俗学成立の初期、各方面で活躍する知識人が「民間歌謡」などの口承文芸を全国規模で収集したことがあるが、彼らの多くが文学者あるいは民間文学愛好者であり、特殊な時代背景の下、共通した理念に従って共同作業に徹した。各自が何か特有の専門知識や技術をもちよって作業を行ったわけではない。

れはかつて民俗学が内外から浴びた批判を思い出させる。特に現在パラダイムの転換期にある中国民俗学では、担い手に自由な人としての主体性を取り戻すための理論構築がなされつつあり、「民間社会」と平等な対話関係を築こうという努力が目立つので、⁽⁶⁾この視点から昔ばなし研究所の実践をみると、民俗学と相容れない壁を感じた。

つまり今回の調査では私の当初の目的は果たされなかったわけだが、個人的には多くのことを考えさせられた二週間だった。たとえば前述した民俗学者自身による民俗の再創造という問題もそうである。両機関での聞き取り調査中、これは民俗学者だからこそ頭を悩ませずにはいられない特有の問題であることを私は痛感した。また、神奈川大学COEプログラムでは更に多くの方法論的な示唆を得ることもできた。中国民俗学の現状から見て、第一班の「絵引」作成や第五班の実験展示などは、十分に応用可能な方法である。そしてこのような具体的な方法と同様に啓発的なのは、資料生成の方法論になりうる可能性を秘めた「体系化」という概念である。

私の考えでは、ただそこにあるものがすでに神奈川大学COEプログラムのいう「非文字文化」資料なのではない。それは研究者たちが各自の専門知識と理念を持って「非文字文化」という視点から「体系化」しようと努力す



るなかで「非文字文化」資料となるのである。ここで大切なのは「非文字文化とは何か」という見せかけの命題ではなく、いかに「非文字文化」資料を創りだすか、又は創りだすことが可能かという方法論である。個性豊かな研究者たちが主張し合うことで、神奈川大学COEプログラムの目指す「体系化」は、単なる形式上の目標から一種の資料生成の方法論になりうる力強さをもっているように見受けられた。

今回の調査で得られた問題意識と方法論上の示唆を、今後、中国民俗学内での討論に生かしてゆきたいと考えている。

(西村真志葉さんは、2007年7月25日～8月7日まで、訪問研究員として来日された。11ページから21ページの挿絵は西村さんの手によるものである。)

(5) マックス・リュティの様式理論に詳しい小澤俊夫氏は反対されるかもしれない。「本来の姿」というのは「原型」ではなく「目標形式」で、「修正」を行うのは研究者ではなく生きた昔話を持つ「自己修正」能力なのだと。しかし民俗学の観点だけから見れば、文学者としてのリュティの考えはやはりこの点で説得力に欠けるように思われる。

(6) この方面に力を注いでいるのが中国社会科学院の呂微、戸曉輝両氏であり、「民間文学 民俗学の意向方式」(《民間文学 民俗学的意向方式 訪中国社会科学院文学研究所民間文学研究室主任呂微研究員》、《中国社会科学院院報》2006年11月9日)は呂微氏の基本的な考えを最もよく反映した談話録である。また戸曉輝氏の集大成ともいえる『純粹民間文学』は近年出版予定である。

Voices of Young Scholars 2

武士道をめぐる私の2週間

ベネシュ・オレグ (ブリティッシュコロンビア大学アジア研究専攻博士課程) BENESCH Oleg

神 奈川大学COEプログラムに招かれた2週間の滞在の間に、ブリティッシュコロンビア大学アジア研究の博士論文のための研究がかなり進展した。訪日前には、日本のネット上のデータベースを利用して東京近辺の図書館、博物館、古本屋などの情報を調べていた。私

の研究は1895年～1945年間の武士道というイデオロギーの発展の検討であり、2種類の資料に焦点を当てている。1つ目は当時の1次資料であり、2つ目はもっと新しい20世紀前半の政治、教育、社会の歴史についての2次資料である。